



福祉に全力投球

①

「二〇二五年には二百

えた計算だ。

万人が寝たきりといわれるが、そのうち五十万人がこの歩行器を使えば寝たきりにならずに済む」

。リハビリエイド専務の滝沢茂男(たきざわ・しげお、49)は口癖のよ

うにいっつもぞう訴える。滝沢の母、恭子が考案した歩行器によって神奈川県茅ヶ崎市の長岡病院で

は、二百人のリハビリ患者のうち五十人が歩けるようになった実績を踏ま

ていた。議員在職中、母の影響から福祉に重点を置いてきた滝沢は、今後の日本

滝沢は七一年に慶大を卒業後、欧州に留学。帰国後は、藤沢市内で英会

話学院を開校する。その一方、七九年には藤沢市

議会議員に初当選(当時

31)し、三期連続で議員を務めるなど実績を重ね

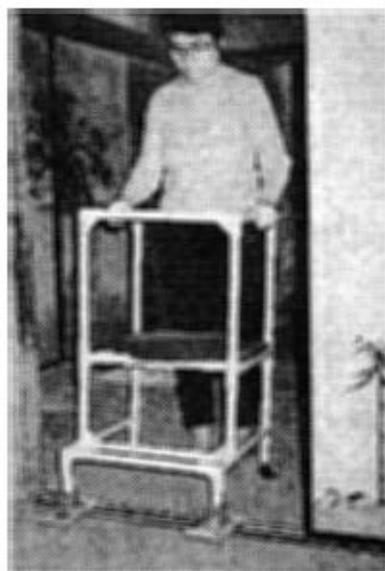
ていた。議員在職中、母の影響から福祉に重点を置いて

きた滝沢は、今後の日本

から福祉に重点を置いてきた滝沢は、今後の日本

から福祉に重点を置いてきた滝沢は、今後の日本

母親が独自アイデアで作った4輪歩行器



市会議員よりやりがい

は財政面や患者の面倒を見る人的面から見ても施設を増やす措置はいずれ

限界がくると考えた。そ

れよりは、母がそれまで取り組んできたリハビリ

の方法をシステム化し、普及させることで母の老後を守る「これが目標ではないかと」(31)と気がついた。

「市会議員を務めるよりも、システムの普及の方が自分にとって重要な

ことであると認識した」と当時を振り返る。滝沢は八七年、三回目の選挙で再当選を果たすが、その時次の選挙は出ない」と誓った。そして母親の退職を機に、リハビリシステムを特許にして商品化させようとしてリハビリエイドを設立した。

ことである」と認識した」と当時を振り返る。滝沢は八七年、三回目の選挙で再当選を果たすが、その時次の選挙は出ない」と誓った。そして母親の退職を機に、リハビリシステムを特許にして商品化させようとしてリハビリエイドを設立した。

道

3A

(敬称略)



福祉に全力投球

②

「もう選挙へは出ない」
 「新しいリハビリシ
 テムの普及を自指して、
 藤沢市会議員を辞め、リ
 ハビリエイドを設立する
 決意をした滝沢。家族も
 その熱意に押され了解し
 てくれた。しかし、日ご
 ろから自分を支援してく
 れる仲間には、口が裂け
 ても「議員を辞める」な
 どと言えなかった。

「何の実績もない人間
 が新しいリハビリシステ
 ムを普及するなど無謀だ
 し、そんなことで議員を

「辞職するのは言語道断と
 反対されるに決まってい
 る」と滝沢は、結局周囲
 の人間には一切自分の気
 持ちを話さなかった。逆
 に一計を案じる。自分一
 人では議会での政策実行
 には限界があると支持者
 に訴え、自分の後継者づ
 くりに乗出した。八九

決意を誰にも言えず

年、複数の議員の輩出を
 目指して「藤沢の夢を語
 る会」を結成、見事次の
 選挙には自分に代わり、
 二人の候補者を擁立、当
 選させた。



藤沢市会議員時代

政治の世界に
 終止符を打った
 滝沢が最初に開
 発に着手したの
 は「トーリフタ
 ー」。神経まひや
 神経炎などが原
 因で下肢筋力が
 低下し、下垂足
 の状態になった
 人に装着させる
 簡便な歩行補助
 器具で、製品は
 九二年に完成した。しか
 し、結局厚生省から歩行
 補助器具として認定が得
 られぬまま計画はとん挫
 する。

きの四輪歩行器の開発を
 考えた。歩行器によって
 多くの人が歩くようにな
 った実績からすれば、す
 ぐにも製品化したかった
 が、歩行器は危険とい
 う世間の常識から、開発を
 止めてきた経緯がある。
 しかし、ある日思いもよ
 らぬところから助け舟が
 現れた。

滝沢はこの時、ソリ付

道

535

(敬称略)



福祉に全力投球

③

厚生省からトリーフタ
ーの認可が下りず悩む滝
沢のもとに、聖マリアン
ナ医科大学からソリ付き
歩行器を着用した月刊誌
で紹介したので、写真
を貸してほしいと依頼が
無い込んだ。

かつて母が神奈川県理
学療法士学会で発表した
「家庭内使用可能な歩行
器の試作」の講演がきっ
かかった。ソリ付き四
輪歩行器とは、前輪部に
ナイロン製のソリを付け
たもので、両腕にまっ

く力のない人でも三才程
程度の段差なら容易に乗
り越えて進むことができ
る。すでにプロトタイプ
はできていたが、とても
商品として出せる代物で
はなかった。滝沢はすく

大学に治験実施提案

に二台機を試作、それが
きっかけて歩行器の開発
が始まる。
九四年一月には、新工
ネルギー・産業技術総合
開発機構(NEDO)が
募集した福祉機器の実用
化助成金に選ばれたが、
「たとえNEDOで受賞
しても、名もない新規参
入組の商品など絶対に充
れない」と新たに東大を
はじめ各大学に治験の実
施を提案する。

展示会などに出席して地道な営業を続ける



ちょうやそのころ滝沢
のもとに、神奈川県原
藤会議長を務める熊山氏
から次の選挙で(九五年
二月)自分の代わりに出
馬しないかとラブコール
が舞い込む。
滝沢は八七年に歩行器
の特許をとっていたが、

これまで売り上げはな
く、介護用のクッション
などで最高でも年間百八
十万円の内収しかなかっ
た。「正直もうだめか」
と考えていただけに、大
喜びしたという。

滝沢の心が揺れるその
時、各大学に桜げていた
治験のボールが次々に舞
い戻ってきたのだった。

(敬称略)

道

536



福祉に全力投球

④

県会議員が歩行器が。活動促進法認定企業に意
 滝沢は悩んだ。かつて二
 人の候補者を滝沢市議に
 当選させた実績と四十六
 歳という年齢。支持者も
 やりたのなら後押しする
 と言ってくれた。しかし
 治験が決まった手前、ど
 うしても「やりたい」の
 ひと言が言えず、政治家
 への夢は消える。

その時、滝沢は最後ま
 でやり抜くしかないと思
 悟を決める。金融機関に
 借金の返済延期を頼みに
 走る一方、中小企業創造

活動促進法認定企業に意
 募する。合格すれば県の
 信用保証協会の保証で二
 千万円まで無担保、無利
 子で銀行から融資を受け
 られる。協会の担当者ほ
 いつでも保証すると理解
 を示した。九六年十一月、
 歩行器はデビュー。銀行
 三行も融資に名乗りを上



一つひとつ壁を乗り越え

「二」で終われば今ま
 での苦労も水の泡。滝
 沢は何としても歩行器を
 社会に広め、保証協会を

「二」で終われば今ま
 での苦労も水の泡。滝
 沢は何としても歩行器を
 社会に広め、保証協会を

見返してやろう
 と闘志を燃や
 す。幸い治験の
 実施から全国の
 公共施設が歩行
 器の無償供与を
 求めていた。
 しかしその
 時、手元には五
 十台の在庫しか
 なく、全部売ら
 ないと次が製造
 できない状態。
 それでも供与はできず、滝
 沢は、ワゴン車に歩行器
 を積み込み、全国行脚に
 乗り出す。車に寝泊まり
 しながら多くの医者や理
 療士の「おれ」に歩行
 器の意義を訴える。今そ
 の成果は始まった。歩行
 器を売りたいと代理店が
 現れる一方、各地で老人
 日常生活補助用具の入浴
 補助用具としての措置事
 例や、補装具の製造業者
 として登録するなど流れ
 は変わりつつある。

(敬称略)
 (この項おわり)

537

道